

『約束 名張毒ぶどう酒事件 死刑囚の生涯』

2012年／日本／齊藤潤一監督作品

刑事司法に翻弄される人生 実写交え、圧倒的な迫力で描き出す

会員 枝川 充志 (61期)

「死刑確定後41年」という人生

この映画は実話である。俳優の仲代達矢が演じる「死刑囚」の奥西勝さんは現在87歳、いま、八王子医療刑務所にいる。逮捕から52年、死刑確定から既に41年が経過した。

映画では「死刑囚が罪を償うのは労働によってではなく、首をつって死ぬことである」とのナレーションが流れる。そうすると奥西さんは「罪を償」っていないことになる。なぜか。

これをこの映画は、実写を交えながら、事の発端から解き明かす。

無罪から死刑へ

事件は1961年3月、三重県名張市の葛尾で起こった。懇親会に集まった村人のうち、ぶどう酒を飲んだ女性15人が倒れ、そのうち5人が死亡した。この5人の中に奥西さんの連れ合いもいた。世にいう「名張毒ぶどう酒事件」である。

奥西さんは事件から6日後に逮捕され自白、逮捕直後の記者会見で被害者らにお詫びをした。その時の奥西さんの生の映像が映し出される。

その後、奥西さんは自白を強要されたとして無罪を主張、1964年、津地裁は無罪を言い渡した。しかし名古屋高裁は死刑判決を言い渡し、1972年、最高裁で死刑が確定した。

映画は、当時の取調べの問題、関係者の証言の矛盾などをつぶさにかつ説得的に映し出す。逮捕時、奥西さんは見せ物かのように村人の中を連行される。そこに奥西さんの幼い長男・長女が駆け寄る。その姿は実に痛々しい。

行きつ戻りつ

死刑確定後、奥西さんは何度も再審を求める。しかしすべて却下。ようやく国民救援会の川村富佐さんが支援の手を差し伸べる。弁護団もまた組まれる。

弁護団ら関係者の努力が実り、死刑確定後、33年経た2005年4月5日には「再審開始・死刑執行停止決定」が出た。川村さん役を演じる天野鎮雄と奥西さん役の仲代達矢が「握手しましょう」と言いつつ、名古屋拘置所のアクリル板越しに掌を合わせ、お互いしぶとく生きることを涙ながらに誓い合う。

しかし、検察官の控訴により決定は取り消され、最高裁は再度、名古屋高裁に差し戻した。その後の2012年5月、名古屋高裁は再び再審開始決定を取り消した。いま、また最高裁にある。いったい、いつまで死刑の恐怖に向き合わせ続けるのか。

歲月人を待たず

映画は、再審決定を覆す裁判官の顔などの実写を織り交ぜながら、奥西さんが裁判所に翻弄される様子を描き出す。仲代達矢がこれをまるで本人であるかのように演じる。

そして、奥西さんの母・タツノさんを俳優・樹木希林が圧倒的な迫力で演じる。息子の無実を信じて、拘置所に通い続ける。その母も84歳で亡くなった。川村さんも亡くなった。そして、奥西さんの長男も既に亡くなった。

最後に、事件のあった名張川沿いの風景が映し出される。事件当時とあまり変わっていない。しかし時間は、確実に過ぎている。

刑事司法について、人の生き死にの何たるかについて、あらためて考えさせられる。俳優の演技とともに、是非見ていただきたいと思う。